

Community-level Activities for Reconciliation in the Suburb of Adelaide : Interviews with the Blackwood Reconciliation Group

Ritsuko Kurita

Postdoctoral Research Fellow, National Museum of Ethnology

Abstract

Using case study analysis of the Blackwood Reconciliation Group in Adelaide, Australia, this article considers the possibilities and limitations of reconciliation activities at the community level. In 1994, local non-Indigenous residents formed the Blackwood Reconciliation Group to commemorate the former residents of the Colebrook Home, a home for Indigenous children of the Stolen Generation. On the basis of interviews with the group, this article analyses the characteristics of their activities and examines the impact of these activities on personal relationships between non-Indigenous and Indigenous residents in their everyday lives.

The group created significant opportunities for former Colebrook residents to share their experiences with the local residents at the Colebrook Home and educate the local community about the history of the Stolen Generation. With assistance from the local government, statues to commemorate the Stolen Generation were erected. They provided a permanent, symbolic place through which Indigenous residents could reaffirm their collective memory and identity, and both Indigenous and non-Indigenous residents could remember and reflect upon this community tragedy.

However, there were certain limitations. First, because of the disadvantaged socio-economic conditions of most Indigenous residents, the activities were substantially initiated by non-Indigenous residents. Second, activities were conducted without the common understanding of the meaning of reconciliation among community members. Third, getting acquainted with former Indigenous residents did not expand the social network of non-Indigenous residents with the Indigenous resident community. Of course, reconciliation beyond political rhetoric cannot be achieved without awareness of existing power relationships between non-Indigenous and Indigenous residents. At the same time, however, developing non-Indigenous residents' empathy for Indigenous residents through similar personal experiences may open new possibilities for establishing horizontal relationships between them.

Key words : Activities for reconciliation, community level, the Stolen Generation, Adelaide

アデレード郊外における 市民レベルの和解活動について

——ブラックウッド和解グループへの聞き取り調査から——

栗 田 梨津子

国立民族学博物館

1. はじめに

オーストラリアでは1990年代以降、先住民との和解政策が本格的に推し進められてきた。和解は、主に、「盗まれた世代」への謝罪や先住民の歴史と文化の尊重をはじめとする象徴的和解と、先住民の社会経済的状況の改善をめざす現実的和解とから成るが（Council for Aboriginal Reconciliation, 1999；Howard, 2000）、「盗まれた世代」への補償問題は、和解プロセスの中で重要な位置を占めてきた（Short, 2008）¹⁾。

和解政策に対し、先住民の多くは、当初から懐疑的な立場をとってきたが（Foley, 1999；Clark, 2000；Short, 2008）、和解を推進する動きは、2000年のシドニー・ハーバー・ブリッジにおける「和解への行進」に見られるように、市民生活の場においても広がりを見せている。たとえば、都市の白人の間では、「盗まれた世代」や監獄死などアボリジニに関する諸問題への関心が高まり、先住民の文化や歴史について学ぶ試みも行われてきた（Hollinsworth, 2010）。さらに、近年では、オーストラリア憲法における先住民の特別な地位の承認を求める運動やイベントが市民団体によって実施されている。

先住民との和解に関する先行研究は、和解に向けた国家レベルでの取り組みとその評価に焦点を当てたものが主流であるが（Gunstone, 2007, 2009）、ショートは和解のプロセスを政府や先住民に加え、一般市民の観点からも分析している。彼によると、1991年に10年の期限付きで設立された「アボリジニとの和解評議会（Council for Aboriginal Reconciliation）」が、地域レベルでの和解促進の手段としてオーストラリア国民の教育を重視した結果、オー

1) 和解政策の中で「盗まれた世代」への補償問題が重視された大きな要因として、1987年から1990年に王立委員会が行ったアボリジニの監獄死に関する調査結果が挙げられる。この調査では、アボリジニの拘留率が非アボリジニの場合よりも20倍高く、さらに監獄死に至ったアボリジニの多くが親子強制隔離政策の下、幼少期に親元から引き離されていたことが明らかにされた。また、2008年2月13日のラッド首相による「盗まれた世代」への公式謝罪は、オーストラリア政府が過去にアボリジニに対して行った暴力を国家の歴史として公式に認めたという点では、和解プロセスにおける重要な第一歩であった。

ストラリア各地で先住民の歴史や文化などを学ぶ研究グループが設立されるなど、主流社会における和解への関心の高まりがみられた。しかし一方で、主流社会では先住民に土地権や自主決定権などの「特別な」権利を与えることには反対する意見も根強く、最終的に「アボリジニとの和解評議会」が打ち出した「和解」の理念もそのような主流国民の意見に追従するものであったことが指摘された (Short, 2008)。この点は、オーストラリアにおいて「和解」が何を意味するのかという議論にもつながる。バーリッジによると、「和解」という言葉の意味や解釈は、オーストラリア内部でもその言葉を発する個人の立場や考えによって多様であり、一般的に先住民の活動家が「和解」という場合、それは先住民独自の権利の承認を含む「実質的和解」を指すのに対し、主流社会の人々の多くにとってそれは、白人入植以前に先住民がオーストラリアを所有していたことを認めることや先住民との共存や調和をはじめとする「象徴的和解」を意味するという (Burrige, 2009)。

こうした先住民と主流社会の間にみられる「和解」をめぐる認識のズレを踏まえた上で、本論では、1990年代前半より南オーストラリア州のアデレード郊外で展開されている市民レベルの和解活動の実態を明らかにするとともに、同活動が地元の白人住民と先住民の新たな関係構築にもたらす可能性と限界について考察することを目的とする。なお、本論で使用するデータの一部は、筆者が2008年から2012年の間に当該地域で断続的に行った聞き取り調査に依っている。

2. アデレード郊外における和解活動

アデレード郊外における和解活動の事例を紹介する前に、アデレードの先住民の概況を確認しておきたい。政府統計によると、2006年の時点で南オーストラリア州の先住民のうち約51%がアデレードに居住し、アデレード総人口に占める先住民人口の割合は約1.2%であった (Australian Bureau of Statistics, 2008: 18)。人口分布に関しては、他の大都市の先住民と同様に、一つの地域に集住することなく、様々な郊外に分散して居住しているが、先住民人口が相対的に高い地域としてアデレード北西部郊外が挙げられる。その居住環境については、ニューサウスウェールズ州 (同州の先住民のうち約32%がシドニーに居住) およびビクトリア州 (同州の先住民のうち約47%がメルボルンに居住) の先住民と比較した場合、平均世帯人数はニューサウスウェールズ州の場合3.1人、ビクトリア州が3人であるのに対し、南オーストラリア州の先住民は3.4人と、若干高くなっている。また、持ち家率については、ニューサウスウェールズ州の先住民の場合36%、ビクトリア州の先住民が40%であるのに対し、南オーストラリア州の先住民の場合は19.8%であり、相対的に低いことが指摘できる (Australian Bureau of Statistics, 2010 a, 2010 b; Australian Bureau of Statistics, 2012; NSW Aboriginal Housing Office, 2012)。

シドニーをはじめとするオーストラリアの大都市では、1997年に「盗まれた世代」に関する調査報告書が公表されたのを機に、市民レベルでの和解活動が本格化した。アデレードでも、和解委員会などの非営利組織や市民団体が協力し、一般市民に和解の重要性を啓蒙するための活動が行われてきた。そのような市民レベルの和解活動の代表例として、アデレード南東部郊外のブラックウッドを拠点に、「盗まれた世代」との和解を推進する市民グループの活動を挙げることができる。ブラックウッド和解グループ（以下和解グループ）は、ブラックウッドに隣接するエデンヒルズで1970年代まで運営されていた「盗まれた世代」のためのキリスト教施設、コールブルーク・ホーム周辺に居住する白人住民が中心となって設立された。以下では、コールブルーク・ホームの歴史を概観した後で、同グループの活動内容および活動の動機についてみていく。

2-1. コールブルーク・ホーム小史

コールブルーク・ホーム（以下、ホーム）は、20世紀初頭に、主流社会で混血のアボリジニの増加に対する懸念が高まる中、混血児の主流社会への同化を目的に、統一アボリジニ宣教会によって設立されたキリスト教施設である。ホームは1924年に、アデレードから北に約1,110キロ離れた地方町、オードナダッタに設立されたが¹、1943年にはアデレード近郊のエデンヒルズへと移され、1973年まで運営された。ホームには、合計350人を超えるアボリジニの子供たちが居住し、彼らの中には後に看護師や教師、政府関係職などの専門職に就き、今日のアボリジニの指導者となった人々もいる（Jacobs et al., 1988: 143-146; Hall, 1997: 14）。

ホーム出身者の経験や思い出は、個人レベルで大きく異なるが、ホームでは年長の子供が年少の子供の世話をする中で、子供たちの中には擬似家族としての紐帯が生まれたという。それはホーム出身者が、現在でも子供の頃に面倒をみてくれた年上の仲間を、*mother* や *auntie* 等の親族呼称で呼ぶことに顕著に表れている。ホーム出身者達は、現在でもホームでの思い出を媒介とした「特別なコールブルーク・アイデンティティ」を共有しているのである。

ホーム出身者同士の繋がりはまた、1990年代からブラックウッドで展開された市民レベルの和解活動を通して一層強化された。後述するように、1994年に白人住民から成る和解グループが設立されたのとはほぼ同時期に、一部のホーム出身者らはコールブルーク・チチジュタ（*tjitji tjuta*）²と呼ばれるグループを結成した。このグループは、和解グループが政府からの資金援助を得てホーム跡地に設立したコールブルーク和解公園（以下、和解公園）で、学生や一般市民を対象にキャンプ・ファイアを囲み、自分達のホームでの体験談を語ってい

2) チチジュタは「子供たち」という意味。

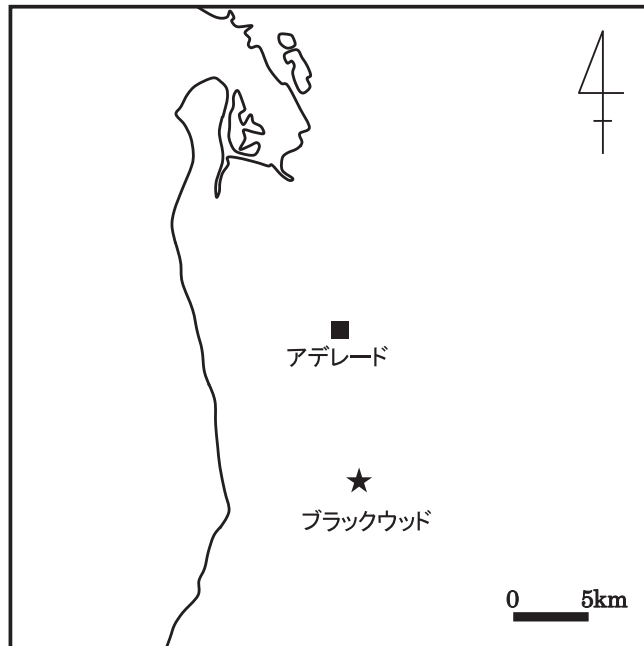


図1 調査対象地域の位置

た。しかし、ホーム出身者の多くは、依然として精神的ストレスや、家族の問題、貧困の問題などを抱えている他、高齢化が進んだこともあり、近年は組織だった活動は行われていない。また、ホーム出身者の中には、和解グループのメンバーにホームでの辛い経験について話を聞いてもらったことに感謝する人々がいる一方で、記念碑の設立に反対し、主流社会における一連の和解活動から距離を置こうとする人々もみられ (Kartinyeri 2000: 129)、和解に対する姿勢は一様ではないといえる。

2-2. 和解グループ

和解グループは、1994年にコールブルーク・ホームの歴史などに関心のある地元住民が集まり、地元図書館で行われた勉強会を皮切りに、先住民との和解を促進する市民グループとして発展してきた。和解グループはその設立の主な目的として、①コールブルーク・ホーム元居住者の記憶に敬意を表すること、②元居住者とその子孫の活動への関与と協力を促進すること、③元居住者とその子孫のために、主流社会における和解の重要性を認識することなどを掲げ、様々な活動を行ってきた。たとえば、1996年には、地元のブラックウッド高校で、「盗まれた世代」に関する理解を深め、先住民との和解を促進するための資金集めの催しや詩の朗読会を行った。この催しには、南オーストラリア州のアボリジニの歴史を著した歴史学者やアボリジニのアーティストがゲストとして招かれ、催しは盛況に終わった。

そして、1997年に「盗まれた世代」に関する政府報告書が発表された直後に、和解公園

が設立された。和解公園では地域集會が開かれ、市長やホーム元居住者などによるスピーチが行われた。この地域集會には、500人を超える市民が集まり、ホームでの過去の痛ましい出来事への共感を通じた和解が模索された。和解グループはこの集會でも露店などを出して資金集めをし、和解グループの新たなメンバーを募った。こうして和解グループによって集められた寄付金と市議会からの財政支援により、和解公園には、親元や祖先の土地から引き離された子供たちの悲しみを象徴する記念碑（Fountain of Tears）と、我が子を失った母親を象徴する記念碑（Grieving Mother）が建てられたのである。記念碑の完成を祝う式典では、地元住民がホーム元居住者に対して謝罪を行った。これに対し、ホーム元居住者の一人であるルイージャ・オダナヒュー³⁾は、「盗まれた世代」を代表して謝罪を受け入れ、赦しを表明したのである（Habel, 1999: 131）。

現在、和解公園は、主に謝罪の日や NAIDOC 週間などに催されるアボリジニ関連のイベントや学校教育におけるアボリジニ学習の場として利用され、政府や学校関係者からはアデレードの市民と先住民の和解の象徴の場としてみなされている。しかし、聞き取り調査によると、和解公園の記念碑には落書きがなされることもあり、アボリジニに関する諸問題に関



写真1 和解公園の記念碑（Fountain of Tears）（2008年5月筆者撮影）

3) 1932年にアイルランド人の父と南オーストラリア州北西部のピチャンチャジャラ出身の母の間に生まれる。2歳の頃に宣教師によってクォーンのコールブルーク・ホームへと連れて行かれる。ホームを出た後は看護師としての訓練を受け、1961年から1972年まで正規の看護師として働く。1970年代からは、アボリジニ問題省の地域担当責任者を務めるなど、政府職員としてアボリジニの健康、住宅、コミュニティ開発など様々な分野の問題に取り組んだ。さらに、1990年から1996年までの間、先住民委員会（ATSIC）の議長を務めた。現在は Reconciliation SA の後援者でもある（Reconciliation South Australia ホームページ：www.reconciliation.org.au/より）。

心のない一部の市民には、公園の意味が十分に理解されているとは言い難いといえる。

こうした状況にもかかわらず、和解グループのメンバーは月に一度、和解公園でミーティングを開き、主に資金集めのための計画や、政府への補助金申請、公園の維持・管理の方法について話し合う。和解グループには2013年現在約50人の会員がいるが、定期的にミーティングに参加するメンバーは25人程度である。彼らの大半は白人住民で占められているが、ミーティングには時折、ホーム元居住者が参加することもある。たとえば、2012年12月に行われたミーティングには、先述のルイージャが出席していた。

和解グループのメンバーが筆者に語ってくれた活動参加の動機として、第一に、過去に地元で起こった悲劇に対して謝罪したいという思いが挙げられる。たとえば、1970年代からブラックウッドに住み、1990年代に地元の「盗まれた世代」に公式謝罪をした元市長の白人女性C氏は、「謝罪の日に催されたイベントに招待されたのを機に、この地域の住民に代わって、過去に起こった悲劇への謝罪をしたかった」と語った。また、ブラックウッドで生まれ育った白人男性は、子供の頃はアボリジニも白人も関係なく、皆一つになってフットボールなどをして遊んでいたのに、その頃近所のホームで何が起こっていたかについて全く知らなかったことに罪の意識を覚えると話してくれた。

第二に、アデレードのアボリジニ地域集団であるガーナのスピリットと繋がり、未来に向けてアボリジニと共存したいという願いが挙げられる。こうした動機を持つ人々は、和解公園を訪ねること自体をスピリチュアルな経験として認識していた。たとえば、インドからの移民で、ブラックウッドに居住して約20年になる看護師の女性は、和解公園での活動を「礼拝」にたとえ、「アボリジニの先祖のスピリットが根付いた土地に住まわせてもらっていることに感謝すると共に、ガーナの土地のスピリットと繋がりたい」と語った。その上で、和解活動を通してアボリジニと調和のとれた社会を作っていくことの重要性を強調した。また、学校教師の白人女性は、「私達は、スピリチュアリティや文化に重点を置いて生きなければならないのに、現在の社会は経済的利益のことばかり考えている。だから私は、この虚無感を満たすために和解活動に参加している」と話してくれた。

第三に、「盗まれた世代」の人々に対する共感が挙げられる。和解グループの中でも特に子供をもつ女性のメンバーは、「母親として、自分の子供に同じことが起こったらと思うと恐ろしい」と話し、「盗まれた世代」の子供たちだけでなく、自分の子供を連れ去られた親への共感を示した。また、自分の身内が「盗まれた世代」と類似の経験をしたというメンバーも存在した。妻と共に和解グループの活動に参加していた、元エンジニアの白人男性M氏は、戦後間もないイギリスでも、孤児がオーストラリアの施設へと送られ、施設では「盗まれた世代」と同様の悲劇が起こったとし、自分の母親も同様の経験をしたことを明かしてくれた。

M氏の母親は、イギリスで生まれ、子供の頃家庭の事情からオーストラリアのタスマニ

アに住む親族のもとに預けられた。彼女は親族から嫌がらせを受けて育ち、両親からの連絡も一切絶たれた。そのため、彼女は長年自分の両親が誰かわからず苦悩し、自分の過去について誰にも語ろうとしなかった。しかし彼女は晩年になってから自分の出自が知りたいと言い出し、M氏が20年かけて家族調査をした結果、最近になってようやく彼女の両親を見つけ出したのであった。M氏は、自分の母親と「盗まれた世代」を取り巻く状況は全く異なるが、母親が経験した精神的苦痛はアボリジニが経験したそれと似ているとし、「盗まれた世代」に対して共感を覚えると語ってくれた。

このように和解グループのメンバーは、過去に近所で起こった悲劇に対して謝罪し、和解活動を通して、未来に向けた先住民との関係構築を志向していることが窺える。しかし一方で、和解グループのメンバーの多くは、日常生活の中で、月一度のミーティングに顔を出す一部のホーム元居住者以外のアボリジニと関わった経験が殆どない。たとえば、先述のC氏はイギリスで生まれ、終戦後に家族と共にアデレードへと移住したが、和解活動に参加する以前にアボリジニと接した唯一の経験といえば、10代の頃に通っていた教会を通してであった。教会の牧師が、チャールズ・パーキンスをはじめとするアボリジニの団体を教会に招待し、教会に集まった人たちに、アボリジニの苦悩について語らせたのである。C氏はその後も、アボリジニの牧師による自伝などの本を通して、「アボリジニの問題」について学んできた。彼女は現在アボリジニが抱える深刻な「問題」として、遠隔地に住むアボリジニのアルコールなどの問題や教育レベルの低さ、生活環境の悪さなどを挙げた。

C氏と同様に、M氏も和解活動に参加するまで、テレビでアボリジニを見る以外に、アボリジニと接する機会は非常に限られていた。M氏はタスマニアで生まれ育ち、1960年代後半にアデレードに引っ越してきた。彼が初めてアボリジニを見たのは、子供の頃、隣の家に住んでいたアボリジニの教会関係者（ダグラス・ニコルズ）⁴⁾であった。彼が次にアボリジニに遭遇したのは、大学生の頃、友人と共にブリスベンに旅行したときのことであった。彼は寒い日の早朝に鉄道の上でアボリジニがキャンプをし、子供が裸で走り回っている姿を見て、オーストラリアで未だにそのような状況が存在することに衝撃を受けたという。

このように、和解グループのメンバーの大半を占める中産階級の白人は、日常生活の中で同じ都市に居住する一般的なアボリジニと接する機会は殆どない。そのため、聞き取り調査を行った限りにおいて、彼らが抱くアボリジニ像は、主に、メディアや本などで頻繁に取り上げられる、劣悪な居住環境やアルコールなどの問題を抱える遠隔地の一部のアボリジニの姿を基に形成されていた。結局、彼らが直接面識のあるアボリジニといえば、一部のホーム元居住者に加え、教会関係者など、西洋の生活様式や価値観を身に付け、主流社会に適応した一握りのアボリジニであった。こうしたエリートのアボリジニの多くは、アデレードのア

4) ヨルタ・ヨルタ出自のアボリジニ。フットボール選手でもあり、キリスト教会牧師でもある。1976年から1977年にかけて南オーストラリア州知事を務めた。

ボリジニ・コミュニティの人々と日常的な関わりを殆どもたないため、白人住民が彼らを通して他のアボリジニと新たな社会関係を築くには至らないのである。したがって、和解グループが目指す先住民との新たな関係構築は、現時点では一部のホーム出身者との間で行われる限定的なものであり、白人中産階級と一般の先住民は依然として、空間的、社会的に隔てられていることがわかる。

3. 和解活動の特徴：可能性と課題

以上みてきたように、和解グループの活動の成果として、地元のコールブルーク・ホームで起こった出来事やそれを取り巻く歴史を地元住民と共有した点が挙げられる。1990年代に和解政策が本格的に進められるまで、白人住民が「盗まれた世代」について知る機会が殆どなかったことを考えると、それは一般市民への啓蒙という意味で画期的な取り組みであった。また、和解公園における記念碑の設立は、その重要性がアデレード全体で十分に理解されていないとしても、白人が多数派を占める公共空間に、ホーム元居住者たちの集団的記憶とアイデンティティを確認でき、なおかつ先住民と非先住民の双方が過去を思い起こすことのできるシンボルを提供したという点で意義深いものであったといえる。

しかし一方で、こうした市民レベルでの和解活動にはいくつかの問題も見られ、それは和解政策自体が孕む矛盾に根差している。第一に、和解グループとコールブルーク・チチジュタが同時期に結成されたにもかかわらず、現地での聞き取り調査によると、現在、後者が実質的な活動を行っていないなど、和解活動が先住民不在の下で行われている点である。この背景には、2-1で述べた通り、多くの「盗まれた世代」を取り巻く社会経済的状況が彼らの和解活動への参加を困難にしていること、さらに和解プロセス自体から距離を置こうとする人々が存在するという現実がある。このような現象は、和解が提案された当初から、大多数の先住民からの賛同を得られないまま、政府主導で一方的に和解プロセスが推し進められてきたことと連動している。また、白人主導で行われる和解活動では、寄付金集めなど、「支援する側」の白人対「支援される側」の先住民という上下関係が生まれやすく、このような不均衡な力関係の下で展開される和解活動では、既存の権力構造がより強化されるおそれがある。

第二に、和解グループの活動動機は様々であったが、一部のメンバーの間で政府による和解のレトリックがそのまま活動参加の動機として語られている点は注目に値する。政府が公表した和解に関する文書では、世界で最古の現存する文化である先住民の文化は、オーストラリアをその他の国々から区別する独自の文化として位置づけられた(Council for Aboriginal Reconciliation 1997: 8)。その上で、「先住民の文化的アイデンティティを承認し、彼ら独自のアイデンティティにおける自尊心を回復させ、彼らの文化や誇り、スピリチュアリティを

共有することは、全てのオーストラリア国民にとっての癒しとなる」と述べられている(Council for Aboriginal Reconciliation 1997: 14)。「ガーナの土地のスピリットと繋がり、アボリジニと共存したい」という移民女性の語りは、アボリジニのスピリチュアリティをオーストラリアらしさの構築のために流用しようとする、政府の和解の言説と重なっているのである(Beckett, 1988; Lattas, 1990; Russel, 2001)。このことから、政府レベルの和解言説が主流社会に浸透した結果、一部の一般市民の間でも、アボリジニのスピリチュアリティがオーストラリア人としての帰属意識を明確にするための拠り所として利用されていると捉えることもできる。和解の理念が先住民を国民国家に統合する理念としてナショナリズムと結びついていたことを考慮すると(鎌田, 2002)、一般市民が和解の言説を安易に受け入れることは危険であるといえる。また、活動動機として政府の和解言説が用いられることは同時に、活動動機自体が曖昧であることを示しているとも考えられ、それは白人住民の間でも先住民との和解が現実は何を意味するかをめぐる共通の認識がないまま、和解活動が行われていることの表れとして捉えることもできる。

第三に、和解グループの白人住民は、先住民との和解の重要性を強調しながらも、彼らの実生活において、一部のホーム元居住者以外の先住民は、依然として「別の世界の住人」として空間的・社会的に隔てられた存在であるという点である。都市の中産階級の白人にとって、先住民およびその歴史や文化は、本やメディアを通して知り、学ぶ対象であることが多い。そこにはオーストラリア社会における白人のポジショナリティの問題が潜んでおり、この点はハージによる多文化主義の議論にも通底している。ハージは、オーストラリアの多文化主義を「もつこと」の多文化主義として特徴づけ、そこではエスニック・マイノリティの多様性が、主体としての白人オーストラリア人のために何ができるかという観点から、評価され価値づけられる客体となるとし、他者を「評価」し、「価値づける」際に働く白人の権力を批判した(ハージ, 2003: 245-247)。和解活動では、白人と先住民の歴史を正しく認識し、それを一般市民に啓蒙することに重点が置かれたが、一方で先住民の歴史や文化を「知り」、先住民を正統なオーストラリア国民の一員として「認める」主体としての白人のポジショナリティに十分な意識が向けられているとは言い難い。まずは、白人が先住民について学び、先住民を一市民として承認することを可能にしている既存の社会構造を認識することが、先住民との真の「和解」に向けた第一歩となるのではないだろうか。

4. おわりに

本論では、ブラックウッド和解グループによる市民レベルでの和解活動に焦点を当て、それが現実の和解にもたらす可能性と限界について考察した。ブラックウッド地元住民による和解活動は、地元の「盗まれた世代」をめぐる歴史を一般市民と共有し、白人と先住民の双

方が過去を想起する場と機会を提供したという意義を有していた。一方で、和解活動へ直接関与する先住民が、主流社会へ適応し、ある程度の経済的資源を有する一部のホーム出身者に限られることや、和解グループのメンバーの多くが日常的に同じ都市に居住する多数派の先住民と接する機会を殆ど有さないことを考えると、その活動は和解政策のレトリックの範囲内に留まるものであったといえる。

このような和解活動の限界の背景には、和解グループの多数派を占める都市中産階級の白人と、親子強制隔離政策に端を発する苦悩から未だに解放されていない「盗まれた世代」や、貧困や差別によって主流社会の周縁に置かれた一般の先住民との間に存在する政治的力関係の問題がある。先住民の主権の承認をはじめとする既存の力関係の見直しや、オーストラリア社会において圧倒的に優位に立つ白人のポジショナリティの問題が無視されたまま和解活動が展開されれば、その効果は限定的なものにならざるを得ないと考えられる (cf. Gunstone, 2005: 4-5; Hollinsworth, 2006: 21)。

しかし一方で、和解活動における白人と先住民の関係を単に「支援する側」対「支援される側」という上下関係として固定的に捉えることにも問題がある。なぜなら、そのような二項対立的な図式は、両者の線引きが困難な状況や、いずれの категорияにも回収されない関係性を見落としてしまうおそれがあるからである。M氏が語ってくれた、自身の親族の経験と「盗まれた世代」の経験の類似性から生まれる共感、そのような二項対立的な関係を乗り越え、過去の出来事へのより心情的な理解を通して、先住民との間に新たな関係を創り出す可能性をもつものである。それは、先住民の歴史や文化を「評価」し、「承認」する白人対「評価」され、「承認」される先住民という垂直的な関係ではなく、類似の経験を媒介とした水平的な関係が生まれる契機となり得る。こうした共感の立場には、先住民を自分とは「別の世界の住人」としてその関係を断ったうえでの同情の立場とは異なり、和解をめぐる問題への関わりの芽がみられるのである (cf. 福岡, 1985: 114-115)。

和解グループは、設立から約20年を迎えるが、現在でもメンバーが途絶えることなく、継続して活動が行われている。都市の中産階級の白人が主体となった和解活動の展開を注視しつつ、今後は多数派の先住民と同じ空間で生活する白人貧困層と先住民の間に生まれ得る、新たな関係構築の可能性についても考察する必要があるだろう。

参考文献

- Australian Bureau of Statistics (2008) *A Social Atlas: 2006 Census of Population and Housing*, Australian Government Publishing Service.
- . (2010 a) 47130 DO 004_2006 *Population Characteristics, Aboriginal and Torres Strait Islander Australians, South Australia*.
- . (2010 b) 4713.2.55.001 *Population Characteristics, Aboriginal and Torres Strait Islander Australians, Victoria*.
- . (2012) *2075.0 Census of Population and Housing – Counts of Aboriginal and Torres Strait Is-*

- lander Australians, 2011.*
- Beckett, J. (1988) The Past in the Present ; the Present in the Past : Constructing a National Aboriginality. In Beckett, J. (ed.), *Past and Present : the Construction of Aboriginality*, pp.191–217. Aboriginal Studies Press.
- Burridge, N. (2009) Perspectives on Reconciliation and Indigenous Rights. *Cosmopolitan Civil Societies Journal* 1 (2), 111–128.
- Clark, G. (2000) Not Much Progress. In Grattan, M. (ed.), *Essays on Australian Reconciliation*, pp.228–234. Bookman Press.
- Council for Aboriginal Reconciliation (1997) *The Path to Reconciliation : Renewal of the Nation*, Australian Government of Publishing Service.
- . (1999) *Draft Document for Reconciliation : A Draft for Discussion by the Australian People*, The Council.
- Foley, G. (1999) Reconciliation : Fact or Fiction. *Journal of Australian Indigenous Issues* 3 (2), 26–31.
- Gunstone, A. (2005) The Formal Australian Reconciliation Process : 1991–2000, Paper prepared for the National Reconciliation Planning Workshop, Old parliament house, Canberra 30–31 May 2005, retrieved from [http : //www.uniya.org/research/reconciliation_gunstone.pdf](http://www.uniya.org/research/reconciliation_gunstone.pdf)
- . (2007) *The Australian Formal Reconciliation Process : “Unfinished Business”*, Australian Scholarly Publishing.
- . (2009) Indigenous Rights and the 1991–2000 Australian Reconciliation Process. *Cosmopolitan Civil Societies Journal* 1 (3), 35–51.
- Habel, N. C. (1999) *Reconciliation : Searching for Australia’s Soul*, Harper Collins Publishers.
- Hall, A. (1997) *A Brief History of the Laws, Politics and Practices in South Australia which Led to the Removal of Many Aboriginal Children*, Department of Human Services, South Australia.
- Hollinsworth, D. (2006) *Race and Racism in Australia* (third edition), Social Science Press.
- . (2010) Racism and Indigenous People in Australia. *Global Dialogue* 12 (2), retrieved from [http : //www.worlddialogue.org/content.php?id=484](http://www.worlddialogue.org/content.php?id=484)
- Howard, J. (2000) Practical Reconciliation. In Grattan, M. (ed.) *Essays on Australian Reconciliation*, pp.88–96. Bookman Press.
- Jacobs, J. M. et al. (1988) ‘Peals from the Deep’ : Re-Evaluating the Early History of Colebrook Home for Aboriginal Children. In Hayes, V. C. (ed.) *Aboriginal Australians and Christian Missions : Ethnographic and Historical Studies*, Special Studies in Religions 6, pp.140–155. Australian Association for the Study of Religions.
- Kartinyeri, D. (2000) *Kick the Tin*, Pinifex.
- Lattas, A. (1990) Aborigines and Contemporary Australian Nationalism : Primordality and the Cultural Politics of Otherness. *Social Analysis* 27, 50–69.
- NSW Aboriginal Housing Office (2012) *Sector Report : Snapshot on NSW Aboriginal Housing*, retrieved from [http : //www.aho.nsw.gov.au/resources/publications/SectorReport.pdf](http://www.aho.nsw.gov.au/resources/publications/SectorReport.pdf)
- Russell, L. (2001) *Savage Imagining : Historical and Contemporary Constructions of Australian Aboriginalities*, Australian Scholarly Publishing.
- Short, D. (2008) *Reconciliation and Colonial Power : Indigenous Rights in Australia*, Ashgate.
- 鎌田真弓 (2002) 「国民国家のアボリジニ」 小山修三・窪田幸子編 『多文化国家の先住民』, 世界思想社 : 129–152.
- ハージ. G. (2003) 『ホワイト・ネイションーネオ・ナショナリズム批判』 保莉実・塩原良和訳, 平凡社 (Hage, G. (1998) *White Nation : Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*. Pluto Press.)
- 福岡安則 (1985) 『現代社会の差別意識』, 明石書店.